「解答」・「解答例」・「出題の意図」

選抜区分	２０２５年度　（選抜区分：一般選抜　後期日程） 文学部・学群　比較文化学科・学類　（科目名：小論文）
出題の意図 （評価のポイント）	**問題１（標準的な解答例）** 西洋の自然観は、神が人間を自然より上位に置いたとするキリスト教の考えを土台とし、精神を持つ人間は自らの利益のために自然を管理できるという信念を持つ。よって、人間は大災害などの自然の脅威に強い意志で立ち向かい、克服することができるとする。これに対し、日本の自然観によれば、自然とは人間を含めた森羅万象を包括し、生死を繰り返す生命の無限の運動である。自然には意図がなく、人間に災害を与えることもあれば、生命の活力を与えることもあるが、人間も自然の一部であるためそれを管理することはできない。よって、自然の脅威に対して立ち向かう強い意志は希薄である。こうした自然観に基づいた「シカタナイ」とは単なる思考停止ではなく、自然の中で生き続けるという覚悟から自然災害に忍従しあきらめるという意味である。（344 字） **問題２（評価のポイント）** 下線部分は冒頭における「復興とは何なのか」という問いに対応している。本文全体を通して著者は、災害からどう復興するかを考えるにあたり日本の自然観を復興させることが必要だと主張しているといえよう。下線部では加えて、そうした自然観の復興は世界的に自然環境が破壊される現代にこそ必要なのだと述べている。すなわち、現代の環境問題の解決にも何らかの効果が期待できると示唆している。 こうした著者の意見について適切な論点を設定し、その論点について自らの見解を説得的に述べられているかが評価のポイントとなる。著者の意見を丁寧に読み取った上で、自分なりの着眼点から論点を設定してもらいたい。論ずる内容は、著者の意見への反論・修正・補強などのいずれでもかまわない。場合によっては複数の論点を組み合わせることで、自身が著者の意見のどこまでを共有し、どこからを批判しているのか明らかにすることもできるだろう。 具体的な論点としては、著者による日本の自然観の理解について疑問を呈してもよいし、日本の自然観を復興することが自然環境の破壊という課題に有効かどうかを論じてもよい。また、日本の自然観を復興する担い手は日本人でなければならないのか、あるいは日本の自然観よりも復興するのにふさわしい自然観があるのではないかといった点を取り挙げることもできよう。もちろん、著者の意見に賛同してもよい。その場合には、日本の自然観を復興することが日本の災害への向き合い方（または世界の自然環境）に何をもたらすか具体的に論じて著者の意見を補強することなどが考えられるだろう。

	説得的な議論を展開するためには、論理的な整合性に加えて、適切な具体例を挙げるなど主張を分かりやすく伝える工夫も求められる。 **解答例１** 私は著者の考えに賛成する。科学の力によって自然災害を克服しようとした場合、巨大防潮堤のように自然を大きく加工し人間の生活を自然から切り離すことになるだろう。それでは自然の恵みを享受することはできず、自然環境の破壊という問題の解決からも遠ざかってしまうからである。他方、日本の自然観により災害に忍従することは、自然を加工・利用しないことを意味しない。例えば、日本には里山というものがある。里山は里と山との間にある人の手の入った地帯を指す。すなわち、里と山との間に境界として緩衝地帯を設定することで、山を加工し利益を得ながらも自然を保全し、自然を保全しながらも災いが里に及ぶのを防ぐ。もちろん、大きな災害には忍従するしかないが、日本の自然観の復興は単なる自然への服従ではない。里山に見られるように、自然を適度に利用しつつ自然災害と自然破壊を防ぐ、すなわち豊かな暮らしを持続することだといえるのである。（398 字） **解答例２** 私は日本の自然観が復興されるべきであるという著者の意見に同意するが、復興すべきなのは日本の自然観だけなのか、その担い手は日本人でなくてはならないのか、という二点に疑問を呈したい。日本人自身が日本の自然観を単に復活させるのは、自然観の復古だろう。しかし、著者の言うように復興は復古ではない。では私たちはどのような自然観を獲得するべきなのか。手掛かりとなるのが、著者の指摘する世界的な自然環境の破壊という現状である。この世界的な課題に対応するためには、各地にある自然と共生する知恵を学び、多様な文化的視点を取り入れながら国際的に協力することが必要だと考える。日本の自然観のみを強調することはかえってその妨げになりかねない。また、いま日本には多くの外国人が暮らしており社会に欠かせない存在である。そうした人たちとも日本の自然観を共有しながら、災害への対応や復興のあり方について共に考える必要があるはずだ。（399 字）